

佐藤忠良と日本農業気象学会賞の賞牌および個人的な体験

広田知良

(農研機構北海道農業研究センター)

日本農業気象学会賞(現在の学術賞と普及賞)の多くの受賞者にこれまで、表彰の際に佐藤忠良氏の制作による「みのり」が賞牌(記念品)として授与されていた(図1)。佐藤忠良氏は1912年生まれで、日本を代表する大変高名な彫刻家の一人である(たとえば、フリー百科事典ウィキペディア(Wikipedia) <https://ja.wikipedia.org/wiki/佐藤忠良> 2016年3月28日 URL 確認)。日本農業気象学会のホームページによると佐藤忠良氏作による賞牌の授与は、本学会の最初の1952年の学会賞からとされる(日本農業気象学会, 2009: <http://www.agrmet.jp/information/2008/minori090226.html> 2016年3月28日 URL 確認)。

筆者は東日本大震災が起きた2011年3月に、僥倖ながら農業気象学会賞学術賞を頂いた。しかし、授賞式当日の筆者の賞牌についての理解は、懇親の席の後に、居酒屋で紛失しかけた程度の認識であった。これは授賞式の当日までに、この賞牌がどのような背景から来ているのか誰からも説明を受けておらず重要性を理解していなかったからである。しかし、翌日、鹿児島県の学会会場までの道中で、たまたまご一緒した前年度の学会賞の受賞者である佐瀬勘紀会員から、この賞牌が佐藤忠良氏の制作で、佐藤忠良氏が大変高名な彫刻家であり、農業気象学会とは大変長い歴史の中での関係があることを丁寧に解説して頂いた。前日に賞牌を紛失しかけたことに冷や汗をかいたことを思い出す。そして、この後、まもなくの同じ月に98歳で佐藤忠良氏はお亡くなりになられた。この時、幼少期から二十歳の頃まで、現在筆者が住んでいる北海道や札幌で過ごされたこと、現在のお住まいが筆者の両親が住む東京都杉並区と同じであったことを知った。その後、2013年4月から農業気象学会賞表彰担当を務め、いろいろな縁を勝手に感じるようになった。

佐藤忠良氏の出世作とみなされる「群馬の人」は1952年の9月に出品された(たとえば、生誕百年彫刻家 佐藤忠良, 美術出版社, 2013)。一方、農業気象学会賞の最初の授与は1952年の4月である(日本農業気象学会,

http://www.agrmet.jp/guide/prize_up_to_date.pdf 2016年3月28日 URL 確認)。このことは、農業気象学会は事実上、佐藤忠良氏とは、彼が世間で著名になる前からお付き合いがあり、賞牌を制作して頂いたと考えることができる。なぜ、農業気象学会は佐藤忠良氏と接点ができ、賞牌を制作して頂くに至ったのか、大きな興味を抱いた。

筆者が学会賞表彰担当を務めることになった2013年4月は、ちょうどタイミング良く私が住んでいる札幌で「生誕100年彫刻家 佐藤忠良展」が札幌芸術の森美術館で催されていた。そこで、美術館の展示物から佐藤忠良氏が戦後、1948年にシベリア抑留から日本に帰還した後、1950年頃から農山漁村文化協会(農文協)で発行していた「農村文化」の表紙絵を描いていたことを知った。農文協は学会員には農業を取り扱った



図1 農業気象学会賞 賞牌 佐藤忠良作「みのり」の例

雑誌・書籍の出版等で良く知られていると思う。ちなみに、「農村文化」は「現代農業」の前身にあたる雑誌である。ここで、農文協関係で農業気象学会の関係者の誰かが、佐藤忠良氏と知り合ったのではないかと想像した。そして、同時期に岡田益己前会長とのメールのやりとりから、高倉直名誉会員の調査で、「1950年頃の福島要一学会幹事(当時)(元学会長, 元日本学術会議会員, 元農林省農事試験場農業気象部長)のお知り合い」であったことを教えて頂いた。さらに福島要一氏のことをもう少し調べてみると、福島氏については農文協のサイトでも紹介されており(<http://nbklib.ruralnet.or.jp/kojin/fukushima/fukushima.html> 2016年3月28日 URL 確認), 農文協でも重要な人物であったことが伺えた。おそらく、農文協を通して、佐藤忠良氏→福島要一氏→農業気象学会のご縁が出来て、農業気象学会賞の賞牌の制作へつながったと推察された。余談であるが佐藤忠良氏は農文協30周年記念リーフレットも制作している(たとえば、生誕百年彫刻家 佐藤忠良, 美術出版社, 2013)。

佐藤忠良氏の作品の系譜を調べてみると、彼は過酷な戦争とシベリア抑留の体験を通じ、国家や人間の本质とは何か? そして、ものをつくることの意味とは何かを問い直し、戦後の現実を直視することを通じて、社会の名も無い市井に一生懸命生きる日本人をモデルにした彫刻を多く作成していることを知った。これが佐藤氏独自の作風の確立につながり、そして、作者自らが「じゃがいものような顔」と形容する「群馬の人」の作品に連なったのであろう(たとえば、生誕百年彫刻家 佐藤忠良, 美術出版社, 2013)。また、この背景から考えると、農業に対しても同様な愛着を持ち、「農村文化」

<http://www.agrmet.jp/sk/2016/H-2.pdf>

2016年5月19日 掲載

Copyright 2016, The Society of Agricultural Meteorology of Japan

の表紙絵を引き受け、これが縁で、農文協とも関係の深い福島要一氏と接点ができ、さらに農業気象学会へも共感や応援の気持ちも込めて賞牌を制作して頂いたのではないかと想像した。

個人的な余談が多い文章となるが、筆者の学会賞受賞の表彰状の文言の中に「野良イモ」という語がある。野良イモとは、収穫後に畑に残ったじゃがいもが雑草化する現象であり、この問題の解決に貢献したことが受賞理由の一つになっている。「じゃがいものような顔」の彫刻が代表作の一つとなっている芸術家と強引なこじつけでもあるが「じゃがいも」でつながり、さらにこの彫刻家が、筆者が受賞した同じ年月にお亡くなりになられたことで、さらに勝手に縁を感じた気持ちをより強めている。

岡田益己前会長経由で、高倉直名誉会員から寄せられた久保祐雄名誉会員の調査によると農業気象学会賞の賞牌と似たような作品に「米作日本一表彰」、「大鹿と娘」、「朝日農業賞」、等がある。2008年講談社出版の「佐藤忠良」によると「みのり」の作成は1965年とされているが、農業気象学会賞の賞牌は前述したように1952年とされ1965年よりかなり先行している。なお、小沢聖会員が学会賞の初代受賞者である故三原義秋氏(前名誉会員)の賞牌を確認したところ、当初は現在の「みのり」とは異なるデザインであることが判明した。いつから現在のデザインになったかは不明であるが、確認できる限りでは、1964年の受賞者の賞牌が現在と同じデザインである。本稿の読者でこれよりも古い賞牌のデザインをご存じの方がいらしたら、是非、ご一報願いたい。

佐藤忠良氏制作による「みのり」の農業気象学会賞の賞牌の授与は、2014年3月での札幌における日本農業気象学会全

国大会での宮田明会員・大谷義一会員・三枝信子会員の共同授賞で、とりあえず最後となった。すなわち、佐藤忠良氏と農業気象学会の関係は佐藤氏がお亡くなりになった後も含めると、半世紀以上の60年余りと非常に長い歴史が連なっている。なお、現在の学会賞の賞牌は、佐藤忠良氏の教え子にあたる藤井浩一朗氏の作品となった。藤井氏との縁は岡田氏が会長時代にできたものであり、高倉名誉会員を通じて彼のご子息(東京造形大から東京芸大の大学院在学中)からのご紹介による。なお、佐藤忠良氏は東京造形大学で長年教育に携わった名誉教授でもあり、藤井氏は東京造形大学のご出身でもある。さらに、高倉直名誉会員のお声がけなどにより過去の受賞者からの寄贈賞牌(佐藤忠良氏作)もいくつか集まってきた。そのため、2015年の3月の大会の授賞式から、これらを受賞者の希望に応じて選択して授与しているところである。受賞者に佐藤氏作の寄贈賞牌を提供ができていない限り、あるいは佐藤氏の教え子の藤井氏の賞牌が授与され続けている限り、佐藤氏と農業気象学会の関係が未だに引き継がれているともみなしても良いかとも思う。

個人的には、普段の日常は研究のことばかり頭から離れられない筆者が、賞牌の背景に想いを馳せることで、研究から文化や芸術、歴史の一面に触れることができたことは大変貴重な機会であった。

謝辞 なお、この文章の作成にあたっては、高倉直名誉会員、岡田益己前会長、小沢聖副会長、鈴木義則名誉会員、松岡延浩会員、五十嵐大造会員、農山漁村文化協会(農文協)の三島弘毅氏から多くの情報提供、ご協力を頂いた。深く感謝を申し上げます。